

戦後／1945-1990の時代を中心に

谷口 綾

1. はじめに

先ほどの報告で、平和博物館の概要についてのお話がありましたので、私からは、国際平和ミュージアムのリニューアル展示について、担当エリアにフォーカスしてお話をすすめていきたいと思えます。

私は、リニューアル事業の常設展示制作では、主に年表展示の戦後のエリア（1945-1990）を担当いたしました。前回の立命館土曜講座では、細谷副館長から、今期リニューアル展示の見どころについてご説明いただいております。本日の報告では、それを踏まえながら、リニューアルに関するこぼれ話という形で、展示制作のストーリーについて、資料との関わりからお話しできればと思います。それではよろしく願いいたします。

2. リニューアル展示のみどころ―戦後エリア

お話に入る前に、いま一度、リニューアルの見どころについて簡単に紹介させていただきます。前回の副館長の報告を参考にして、私なりにまとめています。

今回のリニューアルでは、常設展示に歴史研究の成果を活かすことを目指して、各時代の展示構成が考えられています。

まず、見どころの一つとして、展示では、植民地研究や経済研究の成果にもとづいて、植民地や占領地を含めた帝国日本の生活圏が描かれたことが挙げられます。そして、その中であらためて戦争をはじめとする当時のさまざまな暴力の特質が問われています。

そして二つめは、これまでの研究に「人の移動」研究の成果を加えて、帝国日本の形成・展開から崩壊までを読み解こうと試みた点です。また、この「移動」というキーワードは展示全体を貫く視座の一つであり、各時代の展示の切り口にもなっています。

最後、三つめは、展示にグローバルな視点だけではなく、そこにパーソナルな、「個人」の視点を加えた点です。ミクロとマクロを合わせたといいますか、「個」の歴史や記憶というものを今回の展示にはふんだんにちりばめております。

この三つの見どころのうち、私の担当エリアでは、二つめの「移動」のキーワードが展示作業に大きく関わっています。年表制作では、いわゆる戦後の歩みを、従来の戦後史の見方（敗戦→抑圧からの解放、占領）に沿って描くのではなく、「帝国の崩壊」を起点として、アジア、そして日本の戦後の歴史を描いていくことから始めました。

そして、「引揚げ」や「戦後開拓」、「経済移民」など、この時代の「人の移動」に注目し、それらのトピックとの関わりの中で戦後を捉え直す、という当館ならではの大胆なシナリオが練られていきました。これがリニューアル展示の戦後エリアの見どころの一つになり、旧展示から大きく変わったポイント

トにもなっています。

3. リニューアル展示—学芸員のこぼれ話

このように整えられたシナリオをもとに具体的な資料を考え、展示として空間を組み立てていくのは私たち学芸員の仕事になります。ここからは、制作にかかわる二つのお話をさせていただきます。

一つめは、学術研究を展示に活かすことの難しさ、二つめは、「わかりやすさ」について、です。

1) 学術研究を展示に活かすことの難しさ

前回8月5日の立命館土曜講座の中で、細谷副館長は、リニューアルにかかわった感想として、展示における「わかりやすさ」と「専門知」のバランスを取るのが難しいとおっしゃっていました。展示全体を監修する中で、この二つのバランスに本当に悩まされての感想だろうと思います。

では私はといいますと、論文や研究書の形が基本となる研究成果を、展示として視覚的に立体化・空間化することの難しさを、今回の展示では実感しました。当館には、蓄積された研究成果をあれもこれも展示できるほどのスペースはありません。限られた展示スペースに、いわゆる「専門知」をどのように表現したらいいのか。さらに、戦後エリアでは、扱う情報量も急激に増えてきますので、展示する内容や資料として何を選んで何を捨てるのか。今回の展示では、最後の最後まで本当に悩み続けました。

この写真は、制作途中の年表展示のうち、戦後の冒頭部分を撮影したものです（写真1）。文字解説、写真、実物資料、図表やグラフ、ここには写って



写真1 制作途中の年表展示（戦後）

ませんが、デジタルコンテンツも加えて、戦後のはじまり、「移動」から読み解く歴史を壁一面に表現しています。はたして出来上がりがどうなっているのか、みんなで苦心して作り上げた成果をぜひ見ていただけたらと思います。

2) 「わかりやすさ」をめぐる

二つめは、「わかりやすさ」についてです。今期リニューアルでは、対象を14歳（中学生）と想定して制作を進めています。しかし、これまでの実績からみる実際の来館者は、小中学生の団体（修学旅行や平和学習での利用）が8割を占めるといのが現状です。団体旅行での利用となると、当館での滞在時間は限られてしまいます。このような来館者に対応するためには、制限時間内で見ることができる、理解することができる展示が必要になってくるわけです。そこで、あらためて展示の「わかりやすさ」や「見やすさ」を考えながら、制作を進めなければなりません。

「わかりやすい」展示は確かに便利です。読んですぐわかるとか、見てすぐわかるとか。ただ、その一方で、展示内容が誰でも知っている教科書的なものに偏ってしまうと、博物館だからこそ得られる知見や学びが半減してしまいます。また、作り手が「わかりやすさ」ばかりを追求してしまうと、当館が伝えたいメッセージを十分に発信することができなくなるという状況を生みかねません。

展示制作では、「わかりやすさ」を常に考えながらも、詳細はわからなくても、見たり聞いたり触れたりすることで、こどもたちが何かを感じ取ったり、思いをめぐらせることができるような展示となるよう、素材選びにも終始注意を払いました。

・戦後開拓—京都・原谷の集乳缶

例えば、年表の「戦後開拓」の項目では、戦後の開拓事業を概観するとともに、地元京都の事例を取りあげて展示をしています。当館からバスで10分ほど北上したところに原谷という地域があります。ここはかつて戦後開拓事業の一環で整備された地域です。私たちは、この原谷の開拓を展示として整理



写真2 集乳缶

していく中で、解説やグラフィックだけでなく、実物資料も展示したいと考え、候補となる資料を探しました。

それが、この集乳缶（搾って漉した牛乳を保存する缶）です（写真2）。これは原谷にお住まいの寄贈者の方が、酪農業を終える頃まで実際に使っていたものです。私たちは、当時の生活を考える上では重要だと思ってこの資料を選んだわけですが、制作会社との打合せの中で、「ひと目見ただけではわからない」「（集乳缶が）戦後開拓と結びつかない」などの意見が出され、しまいには、わかりづらい資料の展示はやめようという雰囲気が生まれてしまいました。

「わかりやすさ」問題は、この集乳缶にとどまらず、各時代の展示資料選びでもクリアしなければならない課題の一つとなりました。展示におけるわかりやすさという点では、見てすぐにわかる資料、読んでわかる内容が重宝されます。では、わかりづらい／わからない資料は展示できないのでしょうか。いや、そうではないと思っています。来館者のクエスチョンを生み出す展示、子どもたちから何かを引き出す展示を目指すのであれば、わかりづらい／わからない資料の存在こそ重要だと思っています。

また、博物館の資料はそれぞれに個の記憶、エピソードを持っています。それを含めての資料であり、展示です。一見してわからない資料にも記憶やエピソードが残されています。私たちが資料の背景にあるストーリーを紐解いて展示していくことで、資料たちは来館者とミュージアムとを、時代を超えてつなぐ役割を果たしてくれるようになります。

君島館長は、リニューアル後の当館を「対話するミュージアム」と表現されました。その意味でも、よくわからないと言われる資料たちは、これからの国際平和ミュージアムにとって大切な財産になるのではないのでしょうか。

・「あの一、ちょっとよろしいでしょうか。」

制作現場の雰囲気に関々としていた中で、ある先生のこの一言が発せられた時のことは、今でも忘れられません。つづけて、先生は資料展示の重要性について口にされ、（わからない資料として退けられた）集乳缶の展示をいま一度検討できないか、とおっしゃいました。「あの一、ちょっとよろしいでしょうか。」この一言をきっかけに話が進み、一度は展示資料としてボツになった集乳缶は、再びスポットライトを浴びることになりました。晴れて展示されることになった集乳缶。これをめぐっては本当に色々なことを考えさせられました。なので、個人的にはとても思い入れのある資料となっています。

・ベトナム戦争

もう一つは、ベトナム戦争に関する展示についてです。ベトナム戦争中、世界各地のメディアや写真家たちが現地に入り、戦争のリアルを伝えました。この時に撮られた動画や写真は、反戦・平和を求める世界的な動きに大きな影響を与えたと言われています。当時のメディアの評価をふまえ、展示でビジュアル的な表現をするためにも、この戦争を取り上げる際には、解説だけではなく写真も利用したいと考えていました。

ここでも「わかりやすさ」問題が浮上してきます。制作側から出てきた案は、「安全への逃避」を取りあげてみてはどうかということでした。「安全への逃避」とは、ご存じのとおり、沢田教一さんの作品です。みなさんも、教科書をはじめ、いろいろなメディアで一度は目にされたことがあるのではないのでしょうか。ベトナム戦争を表現する、当時の状況を伝える一枚として本当にすばらしい作品の一つだと思います。ただ、私たちが最終的に選んだのは、この作品になります。

これは、沢田さんと同時期にベトナムに渡った石川文洋さんによって撮られた作品です。タイトルは少し長いのですが、「北ベトナムへの爆撃命令を受け沖縄のアメリカ軍基地から飛び立つB-52爆撃機」です。そして、この1枚、制作側からは「何かわからない写真だね」と言われてしまったわけです。

さて、みなさんはこの作品を見て、何を思われるでしょうか。これを選んだねらいについて、私からはあえて何も説明しないことにいたします。みなさんには、展示室に足を運んでいただき、実際にこの作品を見て、それから周りの展示を見ていただけたらと思います。当館は平和を考えるための博物館です。「(国際平和ミュージアムに)来て、見て、感じて、考えて」いただけたらと思います。

開館後は私も展示室内をうろうろしております。見かけられたらお声がけいただき、感想をお聞かせいただけると大変うれしいです。

4. むすびにかえて

というわけで、長々と話してしまいましたけれども、私からの報告は以上になります。ご清聴ありがとうございました。みなさんのご来館をお待ちしておりますので、ぜひお越しください。